

原 著

## 離島における施設入所高齢者の生きがいづくりに関する研究

- 「ふるさと訪問」事業化への取り組みのプロセスと事業評価・課題 -

大湾明美<sup>1)</sup> 佐久川政吉<sup>1)</sup> 大川嶺子<sup>1)</sup> 下地幸子<sup>2)</sup> 富本傳<sup>3)</sup> 根原憲永<sup>3)</sup>

本研究の目的は、一度施設入所すると帰省の困難な離島の高齢者に対し、一時帰省（ふるさと訪問）を可能にすることにより、施設入所高齢者の生きがいづくりになることを検証することである。対象は、平成12年度試行的ふるさと訪問を実現した2例、平成13年8月1日現在、竹富町に住民票があり要介護認定を受け、介護老人福祉施設入所中の全高齢者43例、平成13年度にふるさと訪問を実現した7例である。方法は、「ふるさと訪問」事業化への取り組みのプロセスと事業評価、課題を見いだすため、報告者らが意図的に企画段階からAction Researchとして介入し観察、面接、状況記録での分析、及び介護老人福祉施設入所者には、ふるさと訪問希望調査を質問紙により実施した。

結果及び考察：1) 2例の試行的ふるさと訪問は、「生きて二度と生まれ島の土を踏むことができない」との思い込みの現状を打破した。2例の反応から、ふるさと訪問は生きがいづくりにつながることが示唆された。2) 離島間のふるさと訪問は、陸路と異なり空路や海路が要求され、費用や時間、介護量が課題である。その実現は、施設サービスにゆだねることなく公的サービスにつなげることで実現する。3) ふるさと訪問希望者は、有効回答者の7割であった。ふるさと訪問希望の有無は、性、年齢、介護度、入所期間、世帯構成、主たる介護者、島での生活満足度、主観的健康観、施設での生活満足度、面会頻度、施設での一番の楽しみ、帰省経験との関係はなく、入所経路のみに有意差がみられた。ふるさと訪問希望は、「ふるさとや家族への思い」が影響していることが推察された。4) ふるさと訪問の波及効果は、本人の生きがいづくりだけでなく、家族関係の深まりや施設サービスにも影響することが示唆された。5) 「誰もが共に生きられる社会の実現」に向け、行政努力だけでなく家族や地域の理解、安定供給可能な介護ボランティアシステムの構築が課題である。

キーワード：離島、要介護高齢者、施設入所、生きがい、ふるさと訪問

### I 緒言

社会福祉の基礎構造改革は新たな福祉社会の形成をめざしている。福祉社会とは、「安心して子供を生育する社会」、「長寿を喜べる社会」、「誰もが共に生きられる社会」の実現である。その第一歩として、超高齢社会に向かうわが国は2000年4月、介護保険法施行に伴い、老人福祉サービスの「措置の時代」が終焉し、「選択の時代」の到来をみた。選択可能なサービスの基盤整備は、民間参入による競争原理を取り入れ、高齢者には自己決定権が行使できるしくみになった。介護サービス参入を容易にするためのNPO法の制定、権利擁護のための生年後見制度制定など、権利として自由な選択によりサービス利用が可能な社会の形成が進行している。

ところが、「沖縄振興開発特別措置法」に基づく39ヶ所の指定離島中、無人島や架橋などにより陸路が確保されている島を除く28島では、島々の保健医療福祉サービスの基盤整備は乏しく、サービス選択は困難である<sup>1)</sup>。

特に9つの有人離島を抱える竹富町の現状は深刻である。人口規模の小さい島嶼社会という地理的条件は、サービスの効率性に欠け、事業の採算上、民間事業者の参入は極めて厳しい状況である。そのため在宅サービスの基盤整備が遅れ、家族による介護が困難になると、これまで生活していた島を離れ島外の施設へ入所する。1度施設入所すると、地理的特徴等から家族や友人との面会も少なく、2度と生まれ島に帰ることはなく、人生の最期を島外の施設で過ごす高齢者がほとんどである。波照間島における住民意識調査<sup>2)</sup>では高齢者のほとんどは、「介護が必要になっても生まれ島で人生の最期を迎えたい」と希望していた。この現実、福祉社会の形成に矛盾し、是正に向けての対策が必要であり、その現状打破の手段として離島出身の「一時帰省（ふるさと訪問）」を考えた。

離島の施設入所高齢者が、2度と生まれ島で生活することができず、終の棲家を覚悟しなければならない現状であっても、帰郷の機会をつくることにより、家族、親戚、知人との再会などをとおして喜びや感動をおぼえ、生きている意味をみいだすことにより、施設での生活も張りのあるものになると考え、生きがいづくりとしてのふるさと訪問を考えた。

1) 沖縄県立看護大学

2) 北部看護学校

3) 竹富町役場

神谷<sup>3)</sup>は、生きがいということばは日本語だけにあり、生きがいの使い方は「この子は私の生きがいです」という生きがいの源泉や対象となるものを指す場合と、生きがいを感じている精神状態を意味する場合の2通りあり、前者を「生きがい」、後者を「生きがい感」と区別している。また、張りあいは、生きがいの一部としている。小林<sup>4)</sup>は、「自分が生きているという価値や意味があるという感じや、自分が必要とされているという感じがある時に、人は生きがいを感じるものらしい。……生きがい感は生存充実感であって、感情の起伏や体験の変化を含み、生命を前進させるもの、つまり喜び、勇氣、希望などによって、自分の生活内容が豊かに充実しているという感じなのである」と述べている。生きがい感と類似した主観的幸福感を測定したPGCモラル・スケールを開発したLawton, M.<sup>5)</sup>によれば、モラルの概念は、自分自身について基本的な満足感を持っていること、環境の中で自分の居場所があるという感じをもっていること、老いていく自分を受容していることと述べている。また、鈴木<sup>6)</sup>は「生きがいという用語は沖縄語にはない」と述べ、類似語として「命果報(ヌチガフー)」をあげ、さらに、沖縄の高齢者は生きがいと楽しみを混同しているとも述べている。生きがいと生きがい感、主観的幸福感やモラルなど概念整理は必要と考えるが、その概念整理は他の研究にゆだね、本報では、生きがいとは一般的な定義、「生きるはりあい。生きていてよかったと思えるようなこと」(広辞苑)とした。

1963年に施行された老人福祉法の基本理念によると「老人は……生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする」と高齢者の社会保障として生きがいづくりが明確に記されている。これまで、高齢者の生きがいづくりとして、老人福祉センターや老人憩いの家などを活動拠点とした様々な活動が展開されてきた。そして、介護保険法施行と同時にゴールドプラン<sup>21)</sup>では、今後5力年間の高齢者保健福祉施策の方向を示した。基本的目標のひとつに高齢者像の「弱者イメージ」を打破し「活力ある高齢者像」の構築のために、高齢者が健康で生きがいをもって社会参加できるよう総合的に支援することを掲げた。2001年には「介護予防・生活支援事業」が具体化され市町村で積極的な取り組みが始まっている<sup>7)</sup>。しかし、それらの事業の生きがいづくりは、地域の虚弱高齢者や自立高齢者の社会的孤独感の解消、自立生活の助長、要介護状態に陥らないような予防的観点主流であり、要介護者等の施設入所者の生きがいづくりについては明記されていない。

報告者らは、地域の虚弱高齢者や自立高齢者だけでなく要介護者等の施設入所高齢者の生きがいづくりに着目している。時代は、措置により最低限の生活を保障するサービスが提供されていた時代から、入所者の意思および人格を尊重し利用者本位のサービス提供へと転換しつつある。施設入所高齢者にも当然その権利はあり、公的

サービス提供の必要性が求められている。

そこで、本報は一度施設入所すると帰省の困難な離島高齢者に対し、一時帰省(ふるさと訪問)を可能にすることにより、施設入所高齢者の生きがいづくりなることを検証するため、「ふるさと訪問」事業化への取り組みのプロセスと事業評価および課題を見出すことを目的とした。

## II 対象地域の概要および研究方法

### 1 竹富町の概要

日本最南端に位置する竹富町は、総面積333.97平方km、東西約42km、南北約40kmの範囲に大小16の島々が点在し9つの有人離島を抱える島嶼町である。昭和13年から町役場が行政区域外の石垣市に置くという変則的な行政形態である。人口は3,718人で高齢化率は25.4%の超高齢社会である(平成14.7月末現在)。9つの有人離島は、面積や人口規模も異なり、沖縄本島に次ぐ面積の西表島の人口は2,045人で総人口の55.0%を占め、最も人口規模の小さい新城島(上地)では3人が生活していた。高齢化率は、波照間37.9%、黒島34.1%、武富島31.6%、小浜島28.1%、西表島19.4%であった。役場所在地の石垣島からの位置は、7kmに位置し海路で約10分の竹富島から、43km離れ海路で約1時間、空路で25分まで様々である。島嶼という広大な町域は自然環境に恵まれ、島の人々は農業や観光を生業として暮らしている。島々には古くから伝えられてきた独特の伝統行事や民俗芸能が受け継がれ、高齢者はその継承者として指導的役割を担い尊敬されている。都会的刺激的の少ない島々では伝統行事等は世代間の交流の場となり、島の人々が一体化する時間でもある。

島々の介護ニーズは島単位で分散され、サービスの効率化に欠け介護保険サービスの基盤整備の遅れは島外の施設サービスへの入所者を増やし、結果として高い介護保険料に繋がっている<sup>8)</sup>。町役場は、介護保険の法定サービスを推進するため、サービス提供事業者への交通費などの経費を助成する事業を町独自で実施し、民間事業所の参入の円滑化を図ると同時に、島々の独自性を活かした住民主体による新たなサービスの提供方法を検討し、サービス供給体制の確保に努めている<sup>9)</sup>。

### 2 研究方法

対象者は、平成12年度、H施設入所中の竹富町波照間島出身者でふるさと訪問を実現した2例、平成13年8月1日現在、竹富町に住民票があり要介護認定を受け、介護老人福祉施設に入所中の全高齢者43例、平成13年度にふるさと訪問を実現した7例とした。研究対象者には、事前に研究主旨を説明し同意を得た。

方法は、「ふるさと訪問」事業化への取り組みのプロセスと事業評価・課題を検討するため、平成12年8月、試行的に実施したふるさと訪問の試みの準備から平成14

年3月末現在までの期間に、観察記録、面接記録、状況記録や質問紙による面接調査を実施した。ふるさと訪問実施時は「介護ボランティア」として全日程同行し、非言語的行動・態度などもデータとした。

### Ⅲ 結果

#### 1. 試行的ふるさと訪問の試み

平成12年8月、H施設に入所中の波照間島出身者でふるさと訪問希望の強い2例について「施設入所者の生きがいづくりとして、生きているうちにもう一度ふるさとの土を踏ませる」という趣旨で試行的にふるさと訪問を試みた。対象のH施設は西表島にあり、平成11年度、島外出身者の一時ふるさと帰省を企画したが、職員体制や交通機関の問題、帰省先での入浴や排泄が問題となり断念した経過があった。試行的ふるさと訪問の対象者は、H施設から交通手段が不便で施設入所者の最も多い波照間島出身者で開催時期は、「生きているうちにもう一度祭りをみたい」という施設入所者の声を反映し、旧盆期間中に最大の伝統行事（ムシャマ）にあわせ、2泊3日で2名とした。対象時期と対象者の決定に伴い準備は、移動手段や宿泊先、介護ボランティアの確保、家族への協力、地域の受け入れ態勢、診療所協力依頼、緊急時連絡体制などを行った。その実施方法や経過、参加者や施設職員、島人の反応などから評価を行い事業化の可能性を導いた。

#### 1) 対象者概要

対象者2名は施設入所以来、一度も帰省経験がない(表1)。A氏は、弟家族と同居していたが介護上の問題で自宅から施設入所した。B氏は、息子家族と同居していたが、本人希望により妻も一緒に施設入所した。

表1 対象者の概要

	年齢	入所期間	介護度	主疾患及び病状	必要とされる主なケア
A氏	79	2年半	3	下肢静脈瘤や第2・3 圧迫骨折などのため疼痛・痺れが強く車椅子移動など困難	移動介助、オムツ交換衣服の着脱、入浴介助
B氏	76	6年	3	ヘルニヤ手術後脊椎障害のため両下肢完全麻痺、尿路感染症	移動介助、排泄介助(トイレ移動、オムツ交換)、褥創処置

#### 2) ふるさと訪問経過

##### 1日目(平成12年8月12日)

対象者2名は、H施設のある場所から港まで施設のリフト付きバスで移動し、おぶって乗船。施設を出発から2時間後、生まれ島、波照間島に到着。A氏の第一声「生きて島に帰れるとは思わなかった」とぼつんとつぶやいた。B氏は「ムシャマを2度と見ることはできないと思ったが明日は楽しみだ。9年ぶりになるかな」と祭りへの期待を膨らませた。

旧盆の線香を仏前に立てるため本家に同行。両氏と

も、出入りに30cmの段差があり車椅子ごと屋内に持ち上げて入れた。室内には仏前まで新聞等を敷き、その上を車椅子で移動した。A氏は弟家族に歓迎され、仏前では、手を合わせながら、あふれる涙で顔をくしゃくしゃにして声を殺して男泣きをした。B氏は、親戚が多く、本家だけでなく数力所の仏前で線香を立てた。知人や親戚は、施設面会に行けないことを詫言、手を握り、涙を流し久しぶりの再会を喜んだ。

##### 2日目(平成12年8月13日)

小雨のなか、祭りの始まりの銅鑼が鳴り響く。町長や、老人クラブ会長、知人など島の人々が近寄り、驚きと喜びの表情を交錯させた。ムシャマが始まると、食い入るように祭りに見入った。2人の表情は、島の高齢者と同化した自然体に戻っていた。島の人々が島内で、車椅子姿の高齢者に出会うことは稀であるが、そのまなざしは温かい。祭りの雰囲気も2人を飲み込み、その瞬間は理想とするノーマライゼーションの世界であった。

A氏は「懐かしかった。来年も来たい。おそばおいしかった」……。B氏の姉(89歳)は、下肢が不自由でほとんど外出しないが、「弟が来ていると聞いて会いにきた」と再会を涙ぐんだ。B氏は震える手で持参したカメラで祭りを撮りながら熱心に見入っていた。祭り終了後、「島巡りをしたい。畑を見たい」という要望があり甥が島巡りを案内した。夕食後、B氏は、「もう死ぬまでムシャマ見えるかどうかと思っていた。久しぶりに酔っぱらった。今日は懐かしかった。たまには泣いたよ」と島酒を飲みながら感慨深げに1日を振り返っていた。

##### 3日目(平成12年8月14日)

見送る島の人々に別れを告げ船に乗り込み、H施設のある西表島に到着。施設の事務局長らに迎えられ、施設に向いふるさと訪問の試みは終了した。

#### 3) ふるさと訪問参加者の反応

1ヶ月後、対象者、その家族、施設職員、島民へふるさと訪問の反応について聞き取り面接した。

**対象者の反応**：対象者2名は、ボランティアとして参加した報告者らとの再会に「ありがとう。世話になっ

た。また来年もよろしく」とうれしそうに話っていた。施設職員からみた変化は、A氏はふるさと訪問前、表情が硬く生きる意欲も乏しく、下肢の痛みやしびれ感を頻回に訴えていた。訪問後その訴えは減り表情明るく「来年は歩いて帰る」とりハビリにも積極的に取り組むようになった。ケアを受けても無表情・無反応であったが、「ありがとう」の言葉が増えた。B氏は、元来の積極性が増し、島の写真を眺めながらうっとりしたり、同施設に入所中の妻や施設職員に自慢げにムシャ・マのことをうれしそうに話していた。

**家族・親戚の反応**：「面会に行きたくてもなかなか行けず...会えてよかった」と涙の再会、「いつも介護してくれてありがとう」、「島につれてきてくれてありがとう」と施設職員やボランティアへの感謝、「もっとゆっくり話しがしたかった」と次回企画への希望などがあった。

**施設職員の反応**：同行者は、「参加者本人や島民から参加者の生い立ちや関心ごと、特技などが聞け対象理解が深かった」「共通話題が持てコミュニケーションが深まった」など対象者との距離が接近。同行しなかった施設職員は「参加した2名がこんなに明るくなれたのにはびっくりした」「施設の企画で継続できるようにしたい」と感想を述べ、事業継続への意欲をうかがわせた。  
島民の反応：「島の人はみんな喜んで」と語り、「施設に入っても島に帰れる」ということで現状を打破したと歓迎された。「他の施設の人も帰れるの?」と新たな期待もあり、また「今のような住宅では迎えるのに難しい。改造するときは考えよう」と迎える準備に話が及ぶなど、島内ではふるさと訪問の話題で持ちきりであった。

## 2. 竹富町いきいきふるさと訪問希望調査結果

試行的ふるさと訪問の翌年、9つの有人離島を抱える竹富町は、ふるさと訪問事業の施策化に取り組み、財団法人・地域社会振興財団が実施する平成13年度長寿社会づくりソフト事業交付金の助成を受け、「竹富町いきいきふるさと訪問事業」を新設した。事業目的は、町出身者の施設入所者が、出身地域の祭りや行事などへの帰郷の実現により入所生活における生きがいを見いだすよう支援すること、及び施設入所者の帰郷が、地域住民に高齢者福祉への理解を高め、地域ボランティア組織を強化することである。「竹富町いきいきふるさと訪問事業」の実施に向け、竹富町出身の介護老人福祉施設入所者にふるさと訪問希望調査を実施した。

住民票で把握した介護老人福祉施設入所対象者43例の入所6施設に、事業主旨、事業及び調査協力依頼文書を送付し、調査の同意を得た。調査は、平成13年8月15日～29日の期間に入所施設を訪問し、施設職員同席を原則に定型化した調査票で面接調査を実施した。調査後、調査データの補足や確認を施設職員に電話聴取した。

### 1) 対象者概要

43例の入所施設は、竹富町西表島1カ所、石垣島2カ所、沖縄本島3カ所の計6カ所であった(表2)。調査不可は17例(入院中4、痴呆などで面接不可能13)で有効回答は26例(60.5%)であった(表3)。

### 2) ふるさと訪問希望状況

ふるさと訪問希望状況は、「希望あり」群19例(73.1%)、「希望なし」群7例(26.9%)であった。ふるさと訪問希望有無と、性、年齢、入所期間、世帯構成、入所前住所、主たる介護者、入所経路、島での生活満足度、帰省経験の有無、介護度、主観的健康観、施設での生活満足度、面会頻度、施設での一番の楽しみ(生きがい)の項目との関係について検討した(表4)。有意差がみられた項目は、入所経路のみで「自宅からの入所者」は「医療機関経由の入所者」より、ふるさと訪問を希望しない傾向があった( $P<0.01$ )。

### 3) 希望あり群の特徴

ふるさと訪問希望者19例の希望理由は、「島をみたい」11例、「家をみたい」「家族に会いたい」「友人・知人に会いたい」「地域の行事に参加したい」「墓参り、線香をあげたい」などであった(表5)。古里訪問の時期は「盆・正月・祭り」12例、家族の都合等(表6)。ふるさと訪問時の不安は、「特になし」8例、「不安あり」は9例であり、不安内容は「移動や食事等介護上のこと」「家族の受け入れ」等で、「緊急時の心配」はなかった。

**事例42** 88歳 男 要介護4 5人の子供たちは島外、入所前は島で老夫婦生活。脳梗塞で、病院や老人保健施設を4ヶ所経由して平成12年9月に入所。過去に島外生活の経験はなく島での生活に満足していた。生きがい(一番の楽しみ)は「子供や孫の面会」であり、施設では「何も楽しみはない」と話していた。施設入所後、帰郷経験はなく「身体が不自由だから帰れない」と答える。ふるさと訪問希望理由は、「妻に会いたい。豊年祭にはみんなに会えるので、豊年祭に帰りたい」。参加時の不安は、移動、排泄、入浴など介護上のことを訴えていた。

4) 希望なし群の特徴：ふるさと訪問を希望しない7例の理由は、「施設からの移動は大変だからいいです」「家族がいない。行かない」「誰もいない。もういい」「誰も知っている人がいない」「同窓生もいないから」「親兄弟もいないし、目も見えないし知らない人ばかりだから」であった。

**事例39** 79歳 女 要介護2 35歳脊椎カリエスで失明。以後、姉や兄の家で生活。姉、兄死亡後甥と生活。親戚に気苦労して生活するより入所したいと本人希望で昭和60年6月入所(16年8ヶ月前)。過去の島での生活に不満と答え、生きがい(一番の楽しみ)は、姪や甥宅に

2～3ヶ月に1回外泊する事。帰省の経験は法事や盆で4回あるがここ4～5年はなし。今回のふるさと訪問参加を希望しない理由は、「4回目の帰省で旧盆を済ませた翌日、本家の甥から追い出された。兄弟もいないし、知らない人ばかり。島に行きたいと思わない。数年先世話になった兄の法事には行きたい」。人生の最期は施設で静かに過ごしたいと希望していた。

るさと訪問は3つの島に7例（波照間島5例、小浜島1例、竹富島1例）が実現した。西表島の試行的実施のH施設と石垣島の施設2ヶ所の3施設から5例が波照間島、沖縄本島具志川市の施設から小浜島へ、那覇市の施設から竹富島へのふるさと訪問であった。波照間島へは、本大学学生ボランティア5名も参加した。施設入所者の生きがいがづくりとして実施したふるさと訪問が、対象者本人の生きがいがづくりのみでなく、その家族や施設職員等に波及効果をもたらした結果を1事例で報告する。

3. ふるさと訪問の波及効果  
第2段階の調査結果、ふるさと訪問希望者19例中、ふ

表2 調査対象者の概要

施設名	番号	性別	年齢	入所前情報				入所期間	介護度	入所経路	入所理由
				住所	職業	世帯構成	介護者				
H 竹富町	1	男	77	波照間島	半農半漁	同居世帯	○ 息子	7年 2ヶ月	3	自宅→病院→施設	本人希望
	2	男	81	波照間島	農業、その他	同居世帯	○ 兄弟	3年 8ヶ月	4	自宅→施設	介護上の問題
	3	女	89	西表島	農業	同居世帯	○ 嫁	2年 4ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	4	女	85	西表島	農業	老人世帯	○ 配偶者	4年 4ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	5	女	71	西表島	農業、その他	老人世帯	○ 兄弟	6年 0ヶ月	4	自宅→施設	介護上の問題
	6	男	86	西表島	農業、その他	老人世帯	○ 配偶者	5年 9ヶ月	3	自宅→施設	介護上の問題
	7	男	85	西表島	農業	老人世帯	○ 配偶者	1年 2ヶ月	3	自宅→病院→施設	介護上の問題
	8	女	73	西表島	農業	同居世帯	○ 息子	6年 0ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	9	男	79	西表島	農業	同居世帯	○ 配偶者	3年 8ヶ月	5	自宅→病院→施設	介護上の問題
	10	男	84	西表島	畜産	同居世帯	○ 配偶者	1年 6ヶ月	5	自宅→施設	介護上の問題
	11	女	79	鳩間島	農業、その他	老人世帯	○ 配偶者	1年 3ヶ月	2	自宅→病院→施設	介護上の問題
	12	男	95	小浜島	農業	同居世帯	○ 嫁	2年 10ヶ月	3	自宅→施設	介護上の問題
	13	女	81	西表島	慶節作り	同居世帯	○ 息子	4ヶ月	3	自宅→病院→施設	介護上の問題
	14	女	73	波照間島	農業	同居世帯	○ 息子	1年 9ヶ月	2	自宅→病院→施設	介護上の問題
	15	女	69	波照間島	農業	同居世帯	○ 兄嫁	7年 9ヶ月	3	自宅→施設	介護上の問題
	16	男	76	波照間島	半農半漁	老人世帯	○ 嫁	3年 4ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	17	女	78	波照間島	農業	同居世帯	○ 嫁	2年 8ヶ月	5	自宅→施設	介護上の問題
	18	女	91	波照間島	農業	同居世帯	○ 嫁	7年 6ヶ月	5	自宅→施設	介護上の問題
	19	女	88	波照間島	その他	単身世帯	× なし	8年 5ヶ月	1	自宅→病院→施設	介護上の問題
	20	女	89	西表島	農業	老人世帯	○ 配偶者	0ヶ月	3	自宅→病院→施設	介護上の問題
K 石垣市	21	女	86	西表島	農業、その他	単身世帯	× なし	10年 8ヶ月	5	自宅→養護→施設	介護上の問題
	22	女	72	波照間島	農業	同居世帯	○ 兄嫁	4年 2ヶ月	3	自宅→施設	介護上の問題
	23	女	92	波照間島	農業	同居世帯	○ 嫁	1年 6ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	24	女	84	西表島	農業	老人世帯	○ 配偶者	4年 11ヶ月	5	自宅→施設	介護上の問題
	25	女	99	竹富島	農業、機織り	同居世帯	○ 嫁	16年 2ヶ月	5	自宅→施設	介護上の問題
	26	女	89	黒島	なし	単身世帯	× なし	3年 7ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	27	女	102	黒島	農業	同居世帯	○ 嫁	4年 6ヶ月	4	自宅→施設	介護上の問題
	28	女	98	黒島	農業、機織り	単身世帯	× なし	6年 6ヶ月	5	自宅→施設	介護上の問題
	29	女	103	小浜島	農業	老人世帯	○ 孫	3年 10ヶ月	4	自宅→施設	介護上の問題
	30	女	85	波照間島	農業、その他	単身世帯	× なし	9年 6ヶ月	5	自宅→養護→施設	介護上の問題
	31	男	77	西表島	農業	単身世帯	× なし	1年 6ヶ月	5	自宅→病院→施設	介護上の問題
	32	女	85	波照間島	農業	老人世帯	○ 配偶者	1年 10ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	33	女	78	波照間島	農業	同居世帯	○ 息子	10年 10ヶ月	4	自宅→施設	介護上の問題
	34	女	78	波照間島	農業	同居世帯	○ 嫁	3年 2ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	35	男	94	小浜島	農業	単身世帯	○ 娘	2年 10ヶ月	3	自宅→施設	介護上の問題
	36	女	73	波照間島	農業	老人世帯	○ 配偶者	4年 2ヶ月	3	自宅→病院→施設	介護上の問題
N 石垣市	37	女	96	小浜島	農業、機織り	同居世帯	○ 嫁	3年 8ヶ月	4	自宅→施設	介護上の問題
	38	男	87	波照間島	農業	その他	○ 息子	4年 0ヶ月	3	自宅→病院→施設	介護上の問題
	39	女	79	波照間島	なし	不明	○ 甥	16年 2ヶ月	2	自宅→施設	本人希望
S 那覇市	40	男	68	小浜島	農業、その他	老人世帯	× なし	4年 11ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
	41	女	84	竹富島	農業、機織り	単身世帯	× なし	2年 4ヶ月	1	自宅→病院→施設	介護上の問題
G 具志川市	42	男	88	小浜島	農業	老人世帯	× なし	5ヶ月	4	自宅→病院→施設	介護上の問題
A 玉城村	43	男	79	黒島	農業、畜産	同居世帯	○ 息子	2年 4ヶ月	1	自宅→病院→施設	介護上の問題

表3 有効回答者の概要

番号	島外生活	島での生活満足度	施設での生活満足度	主観的健康感	施設での楽しみ(生きがい)							面会頻度	帰省		人生最期の場			
					施設での仕事や役割	レクリエーション活動	趣味の活動	友人等とおしゃべり	職員とおしゃべり	外出や外泊	家族の面会		知人の面会	その他		有	理由	
1	有	満足	満足	健康	○							○	○	○	半年～1年に1回	1回	ムシャーマ	今の施設で静かに
4	有	満足	満足	不明	○										月1回以上	無		わからない
7	無	満足	満足	健康											3～6ヶ月に1回	2回以上	正月、田舎、夕祭	是非、生まれ島に戻りたい
8	有	満足	やや満足	やや不健康	○										月1回以上	1回	父親の法事	できれば生まれ島で
11	有	満足	やや不満	健康	○	○									月1回以上	2回以上	運動会・豊年祭	生まれ島でなくてもよい
12	無	満足	満足	健康											3～6ヶ月に1回	2回以上	豊年祭、法事	わからない
13	有	満足	やや満足	非常に健康	○										月1回以上	2回以上	盆、豊年祭、16日祭	わからない
14	有	満足	満足	不健康											半年～1年に1回	無		是非、生まれ島に戻りたい
15	無	満足	満足	健康	○										2～3ヶ月に1回	無		わからない
20	無	満足	わからない	不健康											3～6ヶ月に1回	無		できれば生まれ島で
21	有	満足	満足	健康	○										月1回以上	無		是非、生まれ島に戻りたい
22	有	やや満足	満足	不健康											半年～1年に1回	無		今の施設で静かに
24	有	やや満足	満足	健康	○										月1回以上	無		今の施設で静かに
26	無	満足	満足	健康	○										月1回以上	無		わからない
27	有	満足	満足	健康	○										月1回以上	無		今の施設で静かに
30	有	満足	満足	不健康	○										2～3ヶ月に1回	無		今の施設で静かに
32	有	満足	やや満足	健康		○									月1回以上	無		できれば生まれ島で
34	有	満足	満足	健康	○										月1回以上	無		今の施設で静かに
35	無	満足	わからない	健康											月1回以上	無		今の施設で静かに
36	無	満足	やや満足	不健康	○										月1回以上	無		今の施設で静かに
38	無	やや満足	わからない	健康											2～3ヶ月に1回	無		わからない
39	有	不満	普通	不健康											2～3ヶ月に1回	2回以上	兄7・13年忌、盆	今の施設で静かに
40	有	満足	満足	やや不健康											ほとんどない	無		是非、生まれ島に戻りたい
41	無	やや満足	満足	やや不健康	○										2～3ヶ月に1回	無		今の施設で静かに
42	無	満足	普通	健康											月1回以上	無		是非、生まれ島に戻りたい
43	有	満足	満足	非常に健康											2～3ヶ月に1回	無		是非、生まれ島に戻りたい

1) 事例概要

**事例41 84歳 女 要介護1** 6人の子育てをし、子供らが島を離れ、夫死亡後20年余り独居で機織りと農業を営みながら、ゲートボールや生きがいデイサービスを利用し竹富島に暮らす。1995年に変形性両膝関節症の悪化で歩行不可能となり県立H病院に入院。3ヶ月後、家屋改修も行い自宅に軽快退院したが、その1ヶ月後膝の痛みで再入院。介護の困難さとリハビリ目的を理由に、子供らの住む沖縄本島のI介護老人保健施設へ入所。3年6ヶ月経過後、1999年4月1日、現在のS介護老人福祉施設に措置入所し現在に至る。現在、要介護1で歩行器を利用し、入浴の一部介助以外はほぼ自立していた。ふるさと訪問希望調査では、「祭りの時期に帰り、祭りをみたい、島をみたい、友人に会いたい、お墓参りをしたい」と希望。施設入所から7年、体が不自由であることを理由に一度も島に戻ったことがない。

2) ふるさと訪問経過

竹富島の最大行事「種子取祭」にあわせ、平成13年11月23～25日(2泊3日)の日程で次男と孫、施設職員(介護職) 報告者ら2名が介護ボランティアとして同行し、ふるさと訪問を実現した。

**1日目(平成13年11月23日)** 施設のリフトバスで那覇空港へ向い、石垣空港から町役場職員の運転で石垣港へ移

動し、目的の竹富島への船に乗り込む。施設出発から約5時間でふるさとの竹富島へ到着。支えられて下船し、懐かしげに島を見回す。到着直後、家族の輪に溶け込み、家族の一構成員となっていた。休憩後、お墓参りを希望。甥夫婦が準備した夕食を同行家族と囲み、到着の知らせに親戚や知人・友人が順次訪れ、7年ぶりの再会を喜んだ。

**2日目(平成13年11月24日)** 「いつもの睡眠薬も飲まず、ぐっすり眠れた」と晴れ晴れとした表情で、朝9時に祭り会場へと急いだ。ふるさとの祭りを一部始終始、拍手や同行者等への舞台内容解説など7時間満喫した。会場では、友人や知人から声をかけられ懐かしんだ。

**3日目(平成13年11月25日)** 離島の朝、隣人や帰省の噂を聞いた友人などが訪れ、再会を喜び、別れを惜しみ、またの再会を祈願し涙した。甥夫婦には、「お世話になった。また来るね」と挨拶し、本人希望でゲートボール場や診療所を見学後、那覇の施設へと向かった。

3) ふるさと訪問参加者の反応

事業終了8ヶ月後、本人、同行した息子、同行施設職員から聞き取り面接した。

**本人の反応**：対象者の感想は、「まさか、本当に帰れ

表4 ふるさと訪問希望状況

N=26(あり=19 なし=7)

質問項目	ふるさと訪問希望		質問項目	ふるさと訪問希望			
	あり	なし		あり	なし		
性別	男	6	2	介護度	要介護1	2	0
	女	13	5		要介護2	2	1
年齢	前期	5	1		要介護3	8	2
	後期	14	6		要介護4	6	2
入所期間	5年未満	16	4		要介護5	1	2
	5年以上10年未満	2	2	非常に健康	2	0	
	10年以上	1	1	健康	10	4	
世帯構成	単身世帯	3	2	主観的健康観	普通	0	0
	老人世帯	8	1	やや不健康	2	1	
	同居世帯	7	3	不健康	4	2	
入所前住所	西表島	5	2	わからない	0	0	
	波照間島	8	2	不明	1	0	
	小浜島	2	2	満足	12	4	
	竹富島	1	0	やや満足	3	1	
	黒島	2	1	普通	1	1	
	旭間島	1	0	やや不満	1	0	
主たる介護者	子供	6	2	生活満足度の	不満	0	0
	配偶者	6	1	わからない	2	1	
	嫁	0	2	月1回以上	9	4	
	その他	2	1	2~3ヶ月に1回程度	4	2	
	なし	5	1	3~半年に1回程度	2	1	
入所経路	医療機関経由の入所	16	1	半年~1年に1回程度	3	0	
	自宅からの入所	2	5**	ほとんどない	1	0	
	養護老人ホーム経由の入所	1	1	施設での仕事や役割	1	0	
生活島での満足度	満足	16	5	施設でのレクリエーション活動	9	4	
	やや満足	3	1	趣味の活動	1	0	
	普通	0	0	友人等とおしゃべり	2	0	
	やや不満	0	0	職員とおしゃべり	1	0	
	不満	0	1	外出や外泊	0	1	
帰省経験の有無	一度もない	15	4	家族の面会	9	2	
	一度だけある	1	1	知人の面会	4	0	
	2回以上ある	3	2	その他	4	2	

\*\*p<0.01

るとは思っていなかった。滞在中は、楽しかった。たくさんのおおきや知人に会えた。家も見ることができ安心した。もっと行きたい場所や会いたい人がいたが滞在期間が短く残念だ。」と語った。

施設職員による本人の変化は、同室者や入所者にふるさと訪問の様子を楽しそうに自慢げに語り、他者へもふるさと訪問への参加を促す。また、ふるさと訪問の写真を掲示した際に、その説明を実習生や面会人、視察者等にいきいきと語っていた。

**家族の反応**：母親のふるさと訪問に際し、反対意見の

子供もいた。しかし、県外に嫁いでいる娘達の意見も聞き、施設職員や同行ボランティアが介護を担当するため不安はないことを知り、次男と孫の同行を含め家族会議で合意が得られた。滞在中は、母親の喜びように、途中で別日程で島に来た長男も一緒に「親孝行ができた」と喜んだ。訪問後、同行した次男は本土に住む姉妹に写真やビデオを送り、ふるさと訪問の様子を知らせた。姉妹も決して喜び、母親へも電話でその喜びを伝えていた。

施設職員からみた家族には変化がみられた。長男は、面会頻度が少なく、対象者との関係も淡泊であり、ふる

さと訪問も合意に時間を要した。しかし、ふるさと訪問を機に面会回数が増え、同室者への差し入れ、施設職員へのねぎらいの言葉かけがみられるようになった。傍からみて親子関係も「氷が溶けていくようにわだかまりが溶けていく」感じがすると語っていた。

**施設職員の反応**：施設職員は、ふるさと訪問には業務として同伴していた。「自宅到着の瞬間、対象者の表情が変化し、施設ではのぞかせない自信に満ちた表情や、多くの知人との再会を目の当たりにし「ふるさとのよさ」を実感した。改めて、介護保険制度のめざす「在宅支援」の意味が理解できた」と語っていた。

訪問後、その感動を職員や入所者にも伝える必要性から、頻回の会議報告や写真展を開催。職員にはふるさと意義、入所者には「私も行きたい」とニーズがでることを期待した。

**施設への波及効果**：ふるさと訪問を初体験したS施設では、施設の職員間、入所者間でふるさとの話題が増加し、入所者のふるさと自慢が始まった。

職員から、ふるさと訪問に関心を寄せた質問や同行参加希望、他の離島出身者にも広げたい等の声が聞かれる。施設に慰問に訪れた離島市町村職員へは「施設入所者のふるさと訪問を竹富町のように市町村事業として取り組んでほしい」と陳情する場面や、「養護老人にも広げたいので休日返上して希望調査をしたい」と申し出る職員、「本島内出身のふるさと訪問としてミニドライブ事業を見直せないか」と具体的提案等が持ち上がっている。

#### IV 考察

##### 1. ふるさと訪問の事業化

協力施設と報告者らの共同企画により、離島の施設入所高齢者のふるさと訪問は実現し、「生きて2度と生まれ島の土を踏むことはできない」との思い込みの現状は打破された。試行的ふるさと訪問者2例の訪問中の反応やその後の変化等からふるさと訪問は生きがいづくりになることが示唆された。

過去の報告で「要介護老人の生きがいとしてのふるさと訪問の試み」<sup>10)</sup>があった。一医療機関が帰宅願望の強い要介護高齢者に施設サービスの一環として実施した1事例紹介であり、H施設の前年度の計画に類似していた。また、文献上はみられないが、数ヶ所の介護老人福祉施設で施設サービスとして沖縄本島内で日帰りによるふるさと訪問を実施していることも把握した。しかし、開始時より施設サービスにゆだねることなく、公的サービスとしての位置づけの必要性を思慮した。その理由は、施設入所高齢者の生きがいづくりとしてふるさと訪問が意義深いと考え、誰でも希望すれば利用できるしくみにすること、陸路移動と異なり離島間の空路や海路移動によるふるさと訪問は、費用や時間、介護量など課題が多く一施設の思いや家族の協力だけでは困難であ

表5 ふるさと訪問希望理由 (複数回答)

	人数	%
島を見たい	11	57.9
家族・親族に会いたい	8	42.1
家の様子をみたい	6	31.6
友人や知人に会いたい	5	26.3
地域の行事に参加したい	3	15.8
行きたい場所がある	1	5.3
その他	5	26.3

表6 ふるさと訪問希望時期 (複数回答)

	人数	%
豊年祭など、島の行事の時	9	47.4
いつでもよい	7	36.8
盆	5	26.3
正月	1	5.3
家族や親族の祝い事などの時	1	5.3
家族の都合のいい時	1	5.3
その他	2	10.5
回答なし	1	5.3

り、行政的、社会的支援が必要であると考えた。そのため、企画段階から意図的にAction Researchとして介入した。ふるさと訪問実施時、全日程介護ボランティアとして参加し、対象者やその家族、親戚、地域の反応や施設職員等を参加観察し、ふるさと訪問終了後、関係者に面接を実施した。試行的ふるさと訪問は、竹富町や沖縄県に報告し、翌年「竹富町いきいきふるさと訪問事業」は誕生した。竹富町出身の高齢者は、「施設入所すると2度と生きて島に帰れない」という現状打破に繋がった。

ニーズが事業(サービス)をつくり、制度化されることは過去の歴史が多く物語っている。訪問看護(在宅看護)の歴史も同様である<sup>11)</sup>。1891年にその必要性から病院の看護婦による訪問看護は誕生したが、100年後の1991年に老人訪問看護制度が創設された。

看護職として、施策化された事業に参加するだけでなく、ニーズがあれば、関係機関等との調整を図りつつ実施し、その効果を具体的に示すことは、関係者への理解を深め、結果的には要介護高齢者のQOL向上に繋がると考えられる。それが、新たな福祉社会に向う「サービス優先からニーズ優先」の発想でもある。

##### 2. 生きがいづくりとしてのふるさと訪問の検証

生きがいの概念整理が曖昧なまま、生きがいづくりとしてのふるさと訪問を検証することには限界がある。生きがいのアセスメント方法として、健康に関連したQOLの一側面に焦点をあて、臨床的にも比較的良好に利用され



ているPGCモラル・スケールがある<sup>12)</sup>。今回の対象者にもPGCモラル・スケールでふるさと訪問の前後比較を試みたが、対象者の理解力や拒否にあいデータ入手を断念した。特に、「1.人生は年をとるに従って悪くなる」「6.年をとって役に立たなくなった」「9.生きていてもしかたないと思う」「14.生きることは難しい」の質問項目では、沈黙で涙ぐみ、「こたえたくない」と拒否された。従って、評価スケールによる評価は行えず、記述式により対象者の反応などを中心に検討した。これまでの研究では「主観的健康観が高いとPGC得点は高い」、「ADLと活動能力が高いとPGC得点は高い」といわれている<sup>13)~15)</sup>。要介護高齢者には生きがいのある生活を送ることはできないかとの疑問が残る。しかし、健康レベルが低くても、「交際頻度を保つことができれば、PGC得点が下がらない」などの報告<sup>16)</sup>もあり、施設入所高齢者にも、ほとんどの施設で実施している趣味や娯楽の時間は、PGCスケールを下げないための施設の努力であるとも考えられる。ところが「交際頻度とPGC得点には性別や職業が影響する」<sup>17)</sup>など、生きがいについての論争があり、生きがいは高齢者1人ひとりの個性によって異なり一般化は困難であるともいわれている<sup>12)</sup>。

今回調査したふるさと訪問希望状況でも希望の有無は、入所経路に有意差が見られたのみで、主たる介護者、島での生活満足度などの入所前情報や入所期間、介護度、主観的健康観、施設での生活満足度、面会頻度、帰省経験の有無など、調査項目と関係がなかった。有意差のみ見られた入所経路では、「医療機関経由の入所者」より、「自宅からの入所者」は、ふるさと訪問を希望しない傾向があった。自宅からの入所者は、家族介護における家族関係の歪みの修復に時間を要していることも考えられた。この結果は、データ数が少ないことも否定できないが、むしろ個別的な「ふるさとや家族への思い」に関係していることが推察された。

ふるさと訪問希望者は、生きているうちに「島や家を見たい」「もう一度ふるさとの土を踏みたい」という思いや、「家族、親戚、友人、知人に会いたい」という愛する者たちとの再会の希望は、家族の都合を遠慮しつつも過去に大事にしていた島の伝統行事や祭事（盆・正月）の時期にふるさと訪問を希望していた。高齢者にとっての最大の生きがいは、家族・子供・孫であるという報告<sup>18)</sup>や、施設高齢者の生きがいは、過去も現在も「家族・友人」が最も多く、生きがい感とQOLは関連があるとの報告<sup>19)</sup>、地域高齢者の生きがい形成に関する要因としても家族、友人、地域とのつながりをあげている報告<sup>20)</sup>、施設入所者のQOLを考える指標にも家族関係基盤や地域生活基盤があげられている<sup>21)</sup>。特に、小さな島社会では人と人とのつながり（ソーシャルサポート）は家族を基盤にして広くて深い<sup>22)</sup>。また、沖縄の高齢者は行事や祭事参加者や役割者は自尊感情が高くQOL向上に影響しているという報告<sup>23)</sup>もある。

離島の高齢者の生きがいとその形成は、高齢者が長く生きてきた日々の家族関係や地域生活に加え、行事や祭事で培われると考えられる。離島の施設入所高齢者が大切にしている家族、地域生活、行事や祭事は、ふるさとを離れ島外に施設入所することにより剥奪される。ふるさと訪問の実現は、施設入所高齢者に家族、友人、島、家、伝統行事、祭事を瞬時ではあるが取り戻すことにより、生きがいづくりに繋がること示唆された。伝統行事や祭事を訪問時期として希望者が多かった理由は、2泊3日限定の条件下で、多くのニーズが満たされるためと推察される。結局、高齢者の生きがいづくりは、「その人が大切にしているものは何か」「生きていてよかったと思えるようなことは何か」という個々のニーズに沿う援助こそ最良であると考えられる。

### 3. ふるさと訪問事業の波及効果と課題

竹富町のふるさと訪問事業目的は、「町出身者の施設入所者が、出身地域の祭りや行事などへの帰郷の実現により入所生活における生きがいを見いだすよう支援すること」、及び「施設入所者の帰郷が、地域住民に高齢者福祉への理解を高め、地域ボランティア組織を強化すること」である。

T氏の場合、本人の生きがいづくりだけでなく、家族については、T氏本人との関係の修復や施設のケアへの感謝、久しぶりの祭りへの心の高鳴り、親孝行した自負心などの効果が伺え、対象者の生きがいは家族関係の修復や深まりをも可能にすることが推察できた。また、同行職員にも家族同様、介護観や仕事観に影響を与えたと考えられる。同行職員の感動の伝授や介護サービスへの考え方の変化は、今後の日々のサービス改善に向けてリーダーシップが期待できる。さらに、施設側は、同伴職員から影響を受け、相乗効果で地域における施設サービスの質向上のバイオニアになる鼓動が伺える。

ふるさと訪問の波及効果は、施設入所高齢者の生きがいづくりから始まり、その波動は家族、施設職員、地域へと広がりつつあることを確認した。

しかし、ふるさと訪問希望者は6島に19例希望していたが、訪問実現は3島に7例であった。その理由は、本人の健康上の問題、帰郷への家族受け入れ上の問題、施設、役場、ボランティア等介護体制上の問題などであった。本人の健康上の問題は、対象の特徴から不可抗力の感もある。希望者が希望時期にふるさと訪問を実現するためには、対象者本人のタイミング、家族や施設の「施設入所高齢者者のふるさと訪問への思い」の共有や地域の受け入れ体制、安定供給可能な介護ボランティアシステムが急務であり事業の定着化には課題が多い。

### V 結論

介護老人福祉施設入所中の離島（竹富町）高齢者に対し、試行的ふるさと訪問の試み、ふるさと訪問希望調査

によるふるさと訪問希望理由を中心に検討し3島に実施した。さらに、ふるさと訪問の波及効果と課題が明確になった。

1. 試行的ふるさと訪問の試みは、H施設と報告者らの共同計画で実施された。報告者らは、準備段階から「ふるさと訪問」事業化を意図しAction Researchとして介入した。ふるさと訪問に全日程同行による参加観察や、ふるさと訪問終了後の面接により、施設入所高齢者のふるさと訪問は生きがいづくりにつながる事が示唆された。その結果を竹富町や沖縄県に報告し、翌年「竹富町いきいきふるさと訪問事業」として誕生した。
2. 竹富町出身の介護老人福祉施設入所者43例のふるさと訪問希望調査を実施した。痴呆や入院中により調査不可を除き有効回答は26例であった。ふるさと訪問希望者は19例で性、年齢、入所前住所、入所期間、介護度、入所理由、島での生活満足度、施設での生活満足度、主観的健康観、一番の楽しみ(生きがい)、面会頻度、帰省経験の有無等の項目との関係はみられず、入所経路のみに有意差がみられた。
3. ふるさと訪問希望理由は、「島や家を見たい」「家族、親戚、友人、知人に会いたい」「伝統行事や祭事の時期に帰りたい」であった。ふるさと訪問希望理由は、島外の施設入所により剥奪された家族、友人、島、家、伝統行事、祭事を瞬時ではあるが取り戻すことが生きがいづくりに繋がることが示唆された。
4. ふるさと訪問の波及効果は、本人の生きがいづくりだけでなく、家族関係の深まりを可能にすることが明らかになった。また、施設職員の介護観や仕事観を刺激し、施設介護サービスの変化の兆しがみえ、ニーズ優先のサービスへの転換が期待される。
5. ふるさと訪問の課題は、「誰もが共に生きられる社会の実現」に向け、家族や地域のふるさと訪問理解による受け入れ体制と、安定供給可能な介護ボランティアシステムの構築である。

謝辞:今回の調査にご協力戴いた本人、家族、介護老人福祉施設職員、その他多くの関係者に感謝いたします。

#### 文献

- 1) 沖縄県: 沖縄県高齢者離島・過疎地域支援計画 - 波照間島をモデルとして -, 57-76, 2001.
- 2) 大湾明美・伊藤幸子・他: 沖縄県有人離島における地域ケアシステム構築に関する研究 - 離島支援体制のモデル化をめざして(第1報) -, 沖縄社会福祉研究, 147-156, 2001.
- 3) 神谷美恵子: 生きがいについて, 14-15, 78-81, みすず書房, 1980.
- 4) 小林司: 生きがいとは何か, P27-28, NHKブックス, 1989.
- 5) Lawton, M.P.: The Philadelphia Geriatric Center Moral Scale: A revision. Journal of Gerontology, 11:15-31, 1975, 古谷野亘: 生きがいの測定 - 改訂PGCモラル・スケールの分析 -, 老年社会学, 3, 83-95, 1981.
- 6) 鈴木信: データでみる百歳の科学, 49-52, 大修館書店, 2000.
- 7) 老人福祉関係法令通知集: 2501-2510, 第一法規, 2002.
- 8) 池田省三: 給付費の地域格差を生んだ3つの要因, 月刊介護保険, 70, 62-63, 2001.
- 9) 富本傳: 離島における地域福祉の鼓動とその波及効果への期待, 日本社会福祉学会第49回全国大会報告書要旨集, 89, 2001.
- 10) 高石利博: 地域での精神医療と老人 - 要介護老人の生きがい...ふるさと訪問の試みについて -, MENTAL HEALTH 心と社会, 78, 76-81, 1994.
- 11) 杉本正子・眞 拓子編集: 在宅看護論, 日本における在宅看護の歴史, 10-14, 廣川書店, 1999.
- 12) 川野雅資・高橋真理編集: 高齢者のアセスメント - 生活行動のアセスメント -, 94-101, 中央法規, 1998.
- 13) 前田大作・野口祐二, 他: 高齢者の主観的幸福感の構造と要因, 社会老年学, 30, 3-16, 1989.
- 14) 細川徹・辻一郎, 他: 高齢障害者の機能的状態の予測要因に関する研究 - 高齢者の拡大ADLと運動能力, 長寿科学総合研究, 7, 306-310, 1997.
- 15) 前田清: 高齢者のQOLに関する研究 - 生活満足度に影響を与えるライフスタイルの縦断的研究, 長寿
- 16) 直井道子: 都市居住高齢者の幸福感 - 家族・親族・友人の果たす役割 -, 総合都市研究, 39, 149-159, 1990.
- 17) 浅川達人・高橋勇悦: 都市居住者の社会関係の特異 - 友人関係の分析を中心として -, 総合都市研究, 45, 69-95, 1992.
- 18) 七田恵子: 高齢者の生活と意識, 老年精神医学雑誌, 8(10), 1083-1089, 1997.
- 19) 山下昭美・近藤享子・他: 施設高齢者の生きがい感とQOLとの関連について, 厚生指針, 48(4), 12-19, 2001.
- 20) 松田晋哉・筒井由香・他: 地域高齢者の生きがい形成に関連する要因の重要度の分析, 日本公衆衛生学会誌, 45(8), 704-712, 1998.
- 21) 木村哲彦監修: 生活環境論, 27, 医歯薬出版株式会社, 2002.
- 22) 大湾明美・仲間富佐江・他: 沖縄県一離島におけるソーシャルネットワークと生活満足度・介護意識・受療意識に関する研究 - 波照間島の事例 -, 女子栄養大学紀要, 31, 133-141, 2000.
- 23) 與古田孝夫・赤嶺依子・他: 沖縄における地域高齢者のself-esteem(自尊感情)とその関連要因についての検討, 医学と生物学, 144(5), 147-151, 2002.

# A Study about Fulfillment in Life for Elderly People from Isolated Islands who Live in Care Houses

- Analysis and Issues in the Process of Building up the " Home Town Visiting " Project -

Ohwan Akemi <sup>1)</sup>, Sakugawa Masayoshi <sup>1)</sup>, Okawa Mineko <sup>1)</sup>,  
Shimoji Yukiko <sup>2)</sup>, Tomimoto Tutae <sup>3)</sup>, Nehara Kenei <sup>3)</sup>

The purpose of this study is to determine if "home town visiting" for the elderly people, who are from isolated islands and living in care houses, heightens their fulfillment in life. The study subjects are, 2 elderly people who experienced " Home Town Visiting " in 2000 ; the 43 elderly people who had resident registrations in Taketomi Municipality at the time of August 1st 2001, and who got the official recognition of Yo-Kaigo-Nintei, and were living in care houses; and seven elderly people who experienced " Home Town Visiting " in 2001. An action research method was introduced. The researchers planned these trial projects, interviewed the subjects, implemented " Hometown Visiting " , evaluated these trials and clarified the problems to be solved in this project. The study method was action research: participatory observation, interview, and analysis.

Results and conclusions: 1) The trial of the hometown visiting changed the possessed idea "never can go back to home island alive". The two elders who succeeded in going back to the home island showed positive reactions. The hometown visiting can be regarded as a way to raise the quality of life of the elderly people. 2) The hometown visiting between isolated islands needs more money, time and care, compared to that in Main Island Okinawa, because it requires movements by airplane and ferry over the sea. The successful point of this project is doing this as one of the social services, not leaving it to individual institutions. 3) 70% of respondents hoped for a hometown visiting. The characteristics of the elders and situations before admission had no relationships to the hope. The longing for the sight of ones hometown and family might have influence on the hope for hometown visiting. 4) The ripple effect of hometown visiting on raising of the quality of life of the elders and strengthen the relationships between family members are suggested. 5) The understanding by family and community, the building of volunteer activity system are needed for the society where everybody lives together.

Keywords: isolated island, officially recognized elderly, institution admission, fulfillment of life, home town visiting

---

1 ) Okinawa Prefectural College of Nursing  
2 ) Hokubu Nursing School  
3 ) Taketomi Municipal Office